

児童期における友人関係の発達

國枝 幹子*・古橋 啓介**

要旨 小学校2年生、4年生、6年生の児童を対象として友人関係の発達に関する調査を行った。結果は、小学校の時期に着実に友人関係を発達させ、心理的依存の対象を両親から友人に移行していることが明らかにされたが、小学校高学年の段階でも、「友人と遊ぶか親と買い物に行くか」という葛藤場面で、友人を選ぶ児童と親を選ぶ児童の数に大きな差はなかった。心理的依存の対象を親から友人へと移行させているが、友人とともに親にも依存していることが示された。

児童期後期や青年期に特徴的に見られるとされるギャング・グループやチャム・グループについては、典型的なギャング・グループはほとんど見られず、チャム・グループについては全く見られなかった。友人関係の発達における男女差では、男子は学年が上がるにつれて連続的に友人との関係性が深まっていくのに対して、女子では2年生から4年生にかけて大きく友人との関係性が深まり、特定の友人との親密な付き合いが見られた。

現代社会における児童期の子どもの友人関係は、これまで指摘されたきたような「グループを作る」や「リーダーがいる」といった特徴は少ないことが明らかにされた。

キーワード 友人関係の発達、児童期、ギャング・グループ、チャム・グループ

目的

子どもの発達と適応の問題を考えると、友人関係の発達は大きな意味を持つ。なかでも児童期は、6歳から12歳頃までの年齢段階であり、比較的安定した心身の発達を示す時期であるとともに、友人関係を基盤に自立に向けた歩みを進める時期である。乳幼児期は、家庭における親子関係が中心であるが、児童期になると、一日の大半をクラスの友達と過ごすことにな

る。そして、学年が上がるに従って、友人との関係はより深まっていく。遠藤(1990)は、田中(1964)やBigelow(1977)の研究を参考に、友人概念や友情概念の発達の变化的特徴を3つにまとめている。すなわち第一の変化は、一時的でこわれやすい関係から持続的關係への変化であり、友人関係の安定性は年齢増加とともに高まることである。第二の変化は、自分の要求満足のために友人が必要だという、功利的・自己中心的な関係から、相互の要求を満足させる

* 田川湯山荘 児童指導員(心理担当)

** 福岡県立大学人間社会学部教授

互恵的な関係への変化である。そして第三の変化は、いっしょに遊ぶ、何かするという行動的・表面的な関係から、互いの考えや感情を共有する、支え助け合う、相互に尊敬するといった、共感的・人格的・内面的な関係への変化である。

保坂・岡村(1986)は、学生相談における研究から、児童期から青年期にかけての友人関係の発達段階についての仮説を提出している。ここでは、児童期後半の親から自立するために友人関係を必要とし始める時期にギャング・グループが見られ、青年前期の中学生頃にチャム・グループが、高校生頃にピア・グループが出現すると指摘している。ギャング・グループは児童期後半における特徴的な友人関係と言える。その特徴は、同性の同年齢児から構成され、排他性・閉鎖性が強く、同行動による一体感が重視され、力関係による役割分化が見られ、固有の価値を持ち、グループのメンバーと強く結びつくことで、親から自立しようとする際に子どもに生じる不安が和らげられる。また、そこでの活動を通して、適切な自己主張の方法やルールを守るなどの、社会生活に必要なさまざまなスキルや知識が習得されるとしている。次の発達段階では、グループのメンバーが互いの共通点や類似性を言葉で確かめ合うことが特徴であるとし、サリヴァン(Sullivan, 1953)のいうチャム(chum)を紹介し、このようなグループから生まれた特別に親密な友人の重要性を指摘している(保坂1996, 1998)。ところで、サリヴァン(1953)は、前青春期における友人関係の重要性について述べているが、8歳から10歳頃に同性の特定の1人の友達に対する親密欲求が出現することを指摘し、このチャム(chum)を得ることが、異性の友人との関係を形成するという青年前期の課題を達成するため

に重要であるとしている。チャムの特徴について両者は同一の見解を示しているが、出現する年齢が異なることが注目される。時代や社会の違いが子ども達の仲間関係の形にも影響を与えるものと考えられる。

ところで、黒沢・有本・森(2003)は仲間関係の発達研究において、ギャング・グループとチャム・グループが1つの因子に混在していることを示し、前青年期から青年期にかけての友人関係が、必ずしもギャング・グループからチャム・グループへと移行するわけではないことを示している。このように、児童期の友人関係の発達に関する先行研究は、友人関係の重要性を指摘することについては一致しているものの、年齢段階や性別に基づいて、現代の子ども達がどのように親子関係から友人関係へと心理的依存の対象を移行し自立していくのか、その実態を示すには至っていない。

本研究は、児童期前期、中期、後期の子どもに対して半構造化面接を行い、それぞれの発達段階の児童の友人関係と親子関係について検討する。半構造化面接を用いるのは、質問紙法では生じる可能性のある理解力・表現力の問題を避けるためと、不明確な回答に対してさらに具体的な質問を適宜実施し、より深いレベルの回答が得られるからである。以下のことを研究目的とする。

目的1 児童期の子ども達が、心理的依存の対象を親子関係から友人関係へと移行させて行く過程を明らかにする。

目的2 児童期、青年前期の友人関係の特徴とされているギャング・グループやチャム・グループが、現代の子どもの友人関係にどのような形で存在するか明らかにする。

目的3 児童期の男児と女児の友人関係の発

達差を明らかにする。

方法

1. 調査対象

福岡県田川郡内の公立小学校（全校児童539名）の2年生33名（男子19名、女子14名）、4年生28名（男子16名、女子12名）、6年生28名（男子13名、女子15名）、計89名（男子49名、女子40名）。

2. 調査時期

2005年9月中旬から10月下旬に調査を実施した。

3. 調査内容

質問紙は、学年と性別を記入するフェイスシートおよび、友達について、友達との過ごし方、家に帰ってからのこと、親との関係の4種の質問項目から構成されている。以下に各質問項目の内容を示す。

質問項目

(1) 友人関係の変化についての質問項目

- ① 人数の変化に関する項目として、友達の有無および友達の人数、異性の友達の有無および人数、おしゃべりをする友達の有無および人数、秘密を話してもよいと思える友達の有無および人数、大事な友達の有無および人数がある。
- ② 内容の変化に関する項目として、他学年の友達の有無、おしゃべりの内容、秘密を話した経験の有無、話した秘密の内容、大事な友達と友達になった時期、大事な友達と他の友達の違い、友達がいなかったら困るか、とその理由、学校の休み時間の過ご

し方について、放課後や休日に友達と遊ぶか、友達関係における葛藤場面での選択とその選択理由、電話でおしゃべりをする頻度と、電話でのおしゃべりの内容であった。

- ③ 仲良しグループに関する項目として、仲良しグループの有無、およびグループに入っているか、メンバーの人数および性別、リーダー的存在の有無、メンバーの入れ替わる頻度、グループに入っていることでよかったなと思うことと困ったなと思うことの有無、その内容、グループに入っていない者への質問であった。

(2) 親との関係についての質問

- ① 帰宅後、親に友達との間で起こった出来事を話すかとその理由、親と友達では、話していてどちらが楽しいか、友達が親かの葛藤場面での選択とその選択理由であった。

4. 手続き

休み時間や一部の授業時間に、調査対象が在籍する小学校の一室にて、質問紙の内容に基づいた1対1の半構造化面接を行った。調査を開始する際に、「今からするのは、小学生のみなさんが普段、お友達とどのように過ごしているのかということや、お友達のことをどのように考えているのかを調査するためのアンケートです。アンケートで聞いたことを、そのまま学校の先生に言うことはありません。また、アンケートには名前も書きませんので、質問にはあなたが思った通りに正直に教えてください。よろしくお願いします。」と教示した。実施時間は1人約20分であった。

結果と考察

1. 友達について

(1) 友達の人数について

友達が「いない」と回答した2年生女子1名と、明確な回答が得られなかった4年生女子1名を除いた調査対象87名の友達の人数の平均および標準偏差を求め、図1に示した。そして、友達の人数について3(学年)×2(性別)の分散分析を行った結果、学年の主効果が有意であった($F(2,81) = 11.74, p < .01$)。性別、交互作用に有意差は見られなかった。LSD法による多重比較を行った結果、友達の人数は2、4年生よりも6年生の方が多くなることが明らかになった($MSe = 421.52, LSD = 10.95, p < .05$)。児童期後期に友人の数が大きく増加することが分かる。

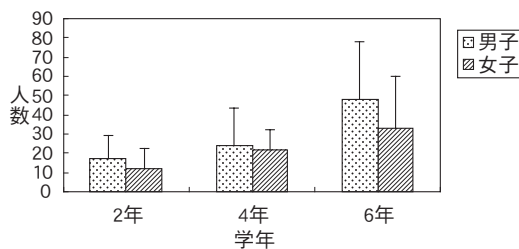


図1 友達の人数の平均と標準偏差

図2は、友達が「同学年のみ」である割合を示したものである。男女別に友達が「同学年のみ」と「他学年の友達がいる」人数について χ^2 検定を行った結果、女子においては有意な偏りは見られなかったが($\chi^2(2) = 3.89, ns$)、男子において人数の偏りは有意であった($\chi^2(2) = 9.79, p < .01$)。そこで、残差分析を行った結果、「同学年のみ」の人数は2年生で多く($p < .05$)、6年生で少なかった($p < .01$)。友達

の人数については、男女共に4年生から6年生にかけて増加するが、これは学年が上がるに従って、同学年の友達だけではなく、他学年の友達も増えてゆくことを示している。そして、女子よりも男子において、学年の上昇とともに他学年の友達が増える傾向が顕著であることが分かる。

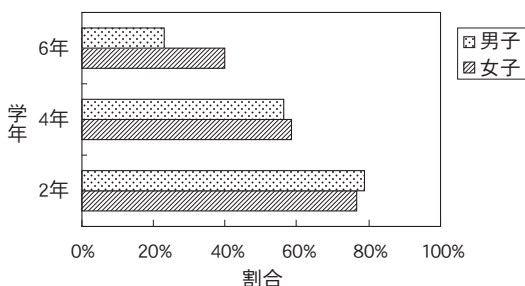


図2 友達が「同学年のみ」である割合

(2) 異性の友達

異性の友達の人数の平均を求め図3に示した。3(学年)×2(性別)の分散分析を行った結果、学年の主効果が有意であった($F(2,81) = 4.72, p < .05$)。そこでLSD法による多重比較を行った結果、2年生よりも6年生の方が異性の友達は多いことが明らかとなった($MSe = 91.47, LSD = 5.10, p < .05$)。

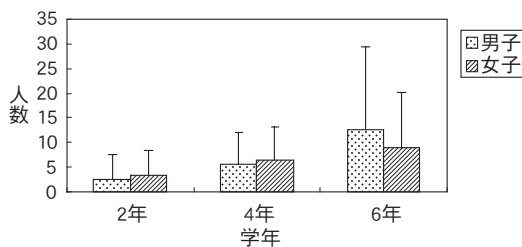


図3 異性の友達の人数の平均と標準偏差

(3) おしゃべりをする友達

おしゃべりをする友達の人数の平均を図4に示した。3(学年)×2(性別)の分散分析を行った結果、学年の主効果が有意であり($F(2,83) = 3.40, p < .05$)、LSD法による多重比較を行った結果、2年生よりも6年生の方がおしゃべりをする友達の人数が多いことが示された($MSe = 173.97, LSD = 6.93, p < .05$)。

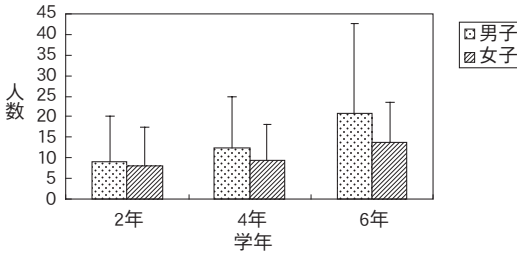


図4 おしゃべりをする友達の人数の平均と標準偏差

次に、複数回答で得られたおしゃべりの内容を5つのカテゴリーに分け、多かったもの上位について見ると、男女共に2、4年生では「何をして遊ぶか」「遊ぶ約束」といった「遊び」が最も多いのに対し(2年生男子64.7%・女子53.8%、4年生男子56.3%・女子66.7%)、6年生では「テレビ」が最も多いという特徴が見られた(男子53.8%・女子66.7%)。したがって、学年が上がるにつれて、友達とおしゃべりは、遊ぶ日時や内容を定めるためにする、というように道具としての働きが強いものから、話題を共有し、会話のやりとりそのものを楽しむものへと、内容が変化していると考えられる。

(4) 秘密を話してもよいと思う友達

秘密を話してもよいと思う友達の人数の平均を図5に示した。3(学年)×2(性別)の分散

分析を行った結果、学年の主効果が有意であり($F(2,83) = 7.40, p < .01$)、LSD法による多重比較を行った結果、2年生、4年生よりも6年生の方が秘密を話してもよいと思う友達の人数が多いことが示された($MSe = 5.39, LSD = 1.22, p < .05$)。また、性別の主効果も有意であり($F(1,83) = 4.04, p < .05$)、男子よりも女子の方が秘密を話してもよいと思う友達の人数が多かった。

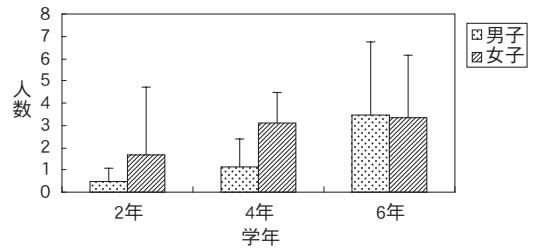


図5 秘密を話してもよいと思う友達の人数の平均と標準偏差

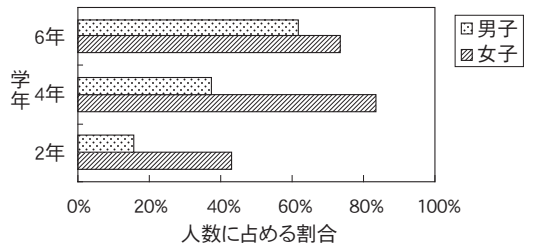


図6 「秘密を話したことがある」人数の割合

図6は、「秘密を話したことがある」と答えた人数の割合を示したものである。男女別に χ^2 検定を行った結果、男子では人数の偏りが有意であった($\chi^2(2) = 7.11, p < .05$)。そこで残差分析を行った結果、「秘密を話したことがある」人数は、6年生で多く、2年生は少ないことが示された。これに対して、女子では人数の偏りに有意傾向が見られ、($\chi^2(2) = 5.30,$

$p < .10$)、残差分析の結果、2年生において「秘密を話したことがある」人数は少なかった ($p < .05$)。以上の結果より、秘密を話せる友達は4年生から6年生にかけて増加し、男子は学年が上がるにつれて秘密を話す経験が増加するのに対して、女子は2年生と4年生の間で秘密を話す経験が増加していた。したがって、学年が上がるにつれて秘密を話せるような、友達の中でもより親密な友達が増加するが、男子よりも女子の方がそのような友達が増える時期は早いと考えられる。

また、「友達に秘密を話したことがある」と回答した児童が実際に話した秘密の内容(複数回答)で回答数が最も多かったものは、2年生の男子では、「遊び」と「自分のこと」でそれぞれ33.3%を占めていた。2年生の女子では「家族のこと」と「好きな人」で、それぞれ53.8%を占めていた。4年生では男女共に「好きな人」が最も多く、男子は33.3%、女子は70.0%であり、女子の方がその割合が高いことが特徴である。6年生の男子では「好きな人」が最多で25.0%、女子は「家族のこと」と「自分のこと」でそれぞれ36.4%であった。

(5) 大事な友達

大事な友達の人数の平均を図7に示した。3(学年) × 2(性別)の分散分析を行ったところ学年の主効果が有意であり($F(2,83) = 11.43, p < .01$)、LSD法による多重比較を行った結果、2、4年生よりも6年生の方が大事な友達の人数は多かった($MSe = 16.12, LSD = 2.11, p < .05$)。

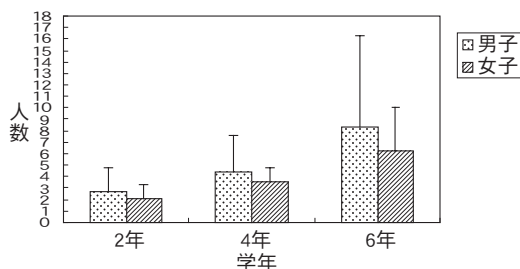


図7 大事な友達の人数の平均と標準偏差

「大事な友達がいる」と回答した対象から複数回答によって得られた、大事な友達とその他の友達の違いを7つのカテゴリー(「活動」「特性」「信用・秘密」「相談・話しやすさ」「関係性」「接近」「その他」)に分類した。各学年で男女共に、遊ぶ内容や量、しゃべる量が違う、といった「活動」が最も多く、2年生と4年生では男女共に50%以上を占めていた。女子においては、学年が上がるにつれて“信用できる”“秘密を言わない”といった「信用・秘密」や“相談相手になってくれる”“話しやすい”といった「相談・話しやすさ」は増える傾向が見られた。男子においては、各学年において“足の速さや力”“おもしろい”“やさしい”といった「特性」が見られたことが特徴として挙げられる。

(6) 友達の重要性

「もし友達がいなかったら困ると思いますか」という質問に対する回答を図8に示した。「とても困る」の割合が、男子では学年が上がるに従って増加する傾向が見られるのに対して、女子では4年生で著しく増加する傾向が見られた。

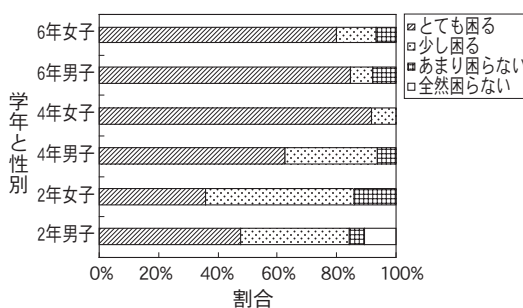


図8 「もし友達がいなかったら困ると思いますか」に対する回答

友達がいなかったら「とても困る」あるいは「少し困る」と答えた人の、友達がいないと困る理由については、男子では、2年生と4年生において「遊びや話」が多いが、学年が上がるにつれてそれを挙げる割合は減少し（2年生75%、4年生60%、6年生41.7%）、“助け合ったりできない”“相談ができない”といった「援助」が増加する傾向（2年生0%、4年生6.7%、6年生16.7%）が見られる。これに対して女子では、男子と同様に「遊びや話」が減少する傾向（2年生33.3%、4年生23.1%、6年生7.1%）が見られるが、友達がいないと困る理由で占める割合は男子に比べて少なく、「援助」が4年生で急増していることと、6年生で「さびしい」が半数を占めていることが特徴として挙げられる。

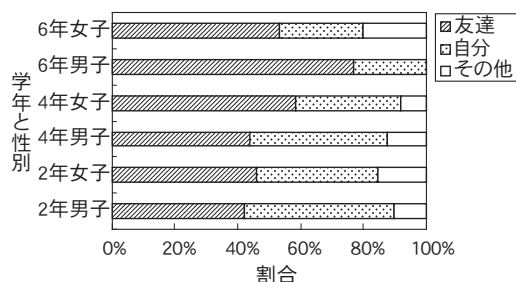


図9 友達とやりたい遊びが違うとき

また、友達とやりたい遊びが異なる、という葛藤場面に遭遇した際に、友達から誘われた遊びをするか、それとも自分がしたいことをするかを回答を図9に示した。女子では、どの学年においても「友達」の占める割合が「自分」よりも高かったが、学年差が見られなかった。これに対して、男子では、2、4年生よりも6年生において友達を選ぶ割合は高い傾向が見られた。そして、その葛藤場面において、自分がやりたい遊びではなく、友達を選んだ児童の、友達を選ぶ理由について、男子では、「楽しい・面白い」「誘われたから」「相手に悪い」の割合が、学年があがるにつれて減少し、「大事だから」が4年生から増加する傾向が見られた。女子では、「楽しい・面白い」が2、4年生においては見られなかったことと、4年生で「誘われたから」が占める割合に増加傾向が見られたことが特徴として挙げられる。また、「大事だから」については男子と同様の傾向が見られるが、男子よりも女子において、それが理由として挙げられる割合は高いことが示唆された。2、4年生では「誘われたから」や「相手に悪い」が上位を占めているのに対し、6年生では「大事だから」が1位であることが特徴であった。

以上の結果から、学年が上がるにしたがって友達の重要性については、量、質共に変化すると言える。すなわち、学年が上がるにつれて友達がいないと困ると感じる割合は増加し、かつその理由は、「遊べない」「話ができない」といった表面的・行動的なものから、「相互援助」や「さびしい」というような互惠内面的なものへと変化していくと言える。そして、このような変化の開始は男子よりも女子において早く見られるが、これは、この時期男子よりも女子において成長が速く、思春期をむかえるのも女子の方が

表1 友達グループを構成する人数

学年・性別	グループの人数	0人	2人	3～6人	7人以上	n
2年	男子	13(68.4%)	0(0%)	4(21.1%)	2(10.5%)	19
	女子	10(71.4%)	0(0%)	2(14.3%)	2(14.3%)	14
4年	男子	8(50.0%)	0(0%)	6(37.5%)	1(6.25%)	15
	女子	2(16.7%)	0(0%)	9(75.0%)	0(0%)	11
6年	男子	3(23.1%)	0(0%)	8(61.5%)	1(7.7%)	12
	女子	2(13.3%)	1(6.7%)	9(60.0%)	3(20.0%)	15

早いことと関連していると考えられる。そして、6年生では、男女共に友達が大事だと感じるために、友達との葛藤場面においても、自分がやりたいことをするのではなく、友達のやりたい遊びに合わせる割合が高いが、友達との葛藤場面で「友達を選ぶ」割合は、女子よりも男子の方が高い。これは、友達がいなかったら困る理由として、男子はいずれの学年においても遊びや話を挙げる割合が高く、友達と遊ぶことが男子児童においてはより重要であるために、このような違いが生じたと考えられる。

(7) 仲良しグループ

「友達の仲良しグループがある」と答えた人数について男女別に χ^2 検定を行った結果、男女それぞれにおいて有意な偏りが見られた(男子： $\chi^2(2)=6.35$, $p < .05$ ；女子： $\chi^2(2)=13.17$, $p < .01$)。そこで、残差分析を行った結果、男女共に「グループがある」という人数は6年生で多く、2年生で少なかった($p < .05$)。

仲良しグループを構成する人数と全体に占める割合を表1に示した。6年生では男女ともに「3～6人」が60%以上を占めており最も多かったが、6年生の女子では、「7人以上」という回答も20%見られ、グループの人数についての認識に個人差があることが示唆された。

図10は、グループに入っている児童のうち、「リーダーがいる」と答えた割合を示している。男女共に2年生でリーダーがいる割合は高くなっていった。4年生では、男子よりも女子においてリーダーがいる割合は高い傾向が見られた。

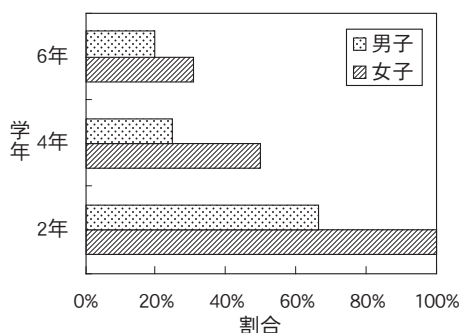


図10 グループに「リーダーがいる」と答えた割合

また、グループのメンバーの入れ替わりの有無について図11に示した。男女共に、学年が上がるにつれて、「よくある」と「たまにある」を合計した割合は減少していること、4年生では、男女共に「よくある」という回答がないこと、6年生では、女子よりも男子の方が「全然ない」の割合が多いことが特徴として挙げられる。以上より、学年が上がるに従って、メンバーが3～6人である友達のグループが増加し、メ

ンバーもより固定化してくるが、その傾向は女子よりも男子の方が強いことが示された。リーダーがいる割合は2年生において高いが、データ数が少なく一般化は困難である。

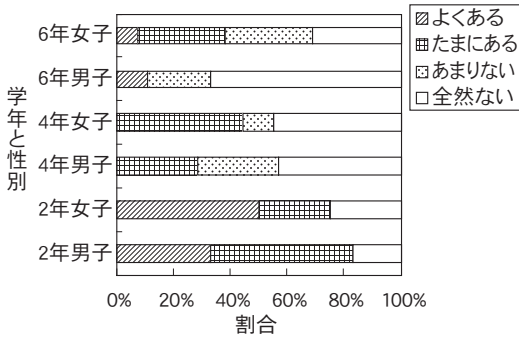


図11 グループのメンバーの入れ替わり

2. 友達との過ごし方

(1) 休み時間の過ごし方

中休み（2時間目と3時間目の間の休み時間）と昼休みの過ごし方のうち、「その他」、「遊んでいない」を除いて上位を占めるものは、男子では、サッカーやフットベースボールなどの「スポーツ」が特徴として挙げられる。これに対して女子では、2年生では少人数で1人遊びに近い、ブランコやジャングルジムなどの「遊具」が上位を占めており、4、6年生では、ルールが明確なトランプやUNOといった「カードゲーム」や「スポーツ」が上位を占めていることが特徴である。また、中休みでは6年生男女共に「おしゃべり」が1位であることも特徴として挙げられる。次に、中休みと昼休みそれぞれにおいて、一緒に遊んだ友達に「異性の友達が含まれている」と回答した児童の割合とその遊びの内容について、2年生では、男子の31.6%、女子の15.4%が異性の友達と一緒に遊んでおり、女子よりも男子の方が異性の友達

と遊んでいると答える割合が高い傾向が見られた。「ごっこ遊び」が見られることと、4年生では、「カードゲーム」や「スポーツ」が中休み、昼休み共に見られ、昼休みになると、男女共に異性の友達と遊ぶ割合が高まる傾向が見られた。6年生では、中休みと昼休み共に、異性の友達と遊ぶ割合が少ないという特徴が示された。

(2) 放課後の遊び

放課後に友達と遊ぶかということについての「よくある」「たまにある」と回答したものを合わせて、放課後に友達と遊ぶことがあるものとし、図12にその割合を示した。男子で「ある」の割合は2、4年生では80%以上を占めているが、6年生で半数以下に減少していた。一方、女子では、学年による違いは見られなかった。また、「ある」の割合が2年生と4年生では、男子の方が多いのに対して、6年生では女子の方が多くも特徴として挙げられる。

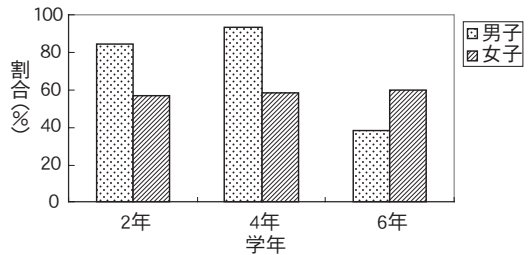


図12 放課後に友達と遊ぶことが「ある」と答えた割合

表2 放課後の遊び(複数回答)

		1 位		2 位	
2年	男子	スポーツ (41.7%)	ゲーム (33.3%)		
	女子	遊具 (75%)	ルール遊び(25%)		
4年	男子	ゲーム (53.3%)	スポーツ (40%)		
	女子	スポーツ (37.5%)	ごっこ遊び(25%)		
6年	男子	スポーツ (40%)			
	女子	おしゃべり (50%)	スポーツ (33.3%)		

次に「最近、友達と放課後に遊んだ日がある」と回答した児童の遊びのうち、上位2つを表2に示した。男子は、「スポーツ」か「ゲーム」をしていたことが特徴として窺える。女子では、「ゲーム」が見られず、2年生では「遊具」が75%と高い割合を示した。また、6年生では「おしゃべり」が半数を占めていた。

また、放課後の遊びに「異性の友達が含まれている」と答えた人数については、どの学年の男女とも、異性の友達と遊んでいる児童は少なく、2年生の男子と4年生の男女で、各1名が「含まれている」と答えたのみであった。これは、放課後に友達と遊んだ児童が少なかったことにも基因するものである。

(3) 休日の遊び

「休日に友達と遊ぶことがあるか」という質問に対し「よくある」または「たまにある」と回答したものを合わせて休日に友達と遊ぶことがあるものとした。その割合は学年差、男女差はあまりなく60%程度が休日に友達と遊んでいることが特徴である。

表3 休日の遊び(複数回答)

		1 位		2 位	
2年	男子	ゲーム (37.5%)			
	女子	遊具 (33.3%)	ゲーム (22.2%)		
4年	男子	ゲーム (58.3%)			
	女子	ゲーム (42.9%)	スポーツ (28.6%)		
6年	男子	ゲーム (66.7%)			
	女子	ゲーム、スポーツ、テレビ (いずれも25%)			

次に、複数回答で得られた、最近休日に友達とした遊びについて、上位を占めるものを表3に示した。男女共に、「ゲーム」が含まれていることが特徴的であり、現代の子どもの遊びを反映しているといえる。また、「テレビ」は6年生の女子の特徴として挙げられる。そして、休日の遊びに「異性の友達が含まれている」割合は2年生が最も高いが20%程度である。4年生の男子では8.3%、女子では14.3%であった。そして、6年生では男女共に異性は含まれていなかったことから、学年が上がるにつれて異性の友達と休日に遊ぶ割合は減少する傾向が見られた。

3. 親子関係

(1) 親との関係

「友達との出来事をおうちの人に話すか」についての回答の中で、「毎日話す」を3点、「たまに話す」を2点、「あまり話さない」を1点、「全然話さない」を0点として、おうちの人に話す得点を算出し、その平均を図13に示した。そして、3(学年)×2(性別)の分散分析を行った結果、交互作用に有意傾向が見られ($F(2,83) = 2.69, p < .10$)、2年生では性差が有意であり($F(1,83) = 12.36, p < .01$)、男子よりも女子の方が得点は高いことが明らかとなった($p < .05$)。そして、女子において学年

間に有意傾向が見られたため ($F(2,83) = 2.78, p < .10$)、LSD法による多重比較を行った結果、女子では6年生よりも2年生の方が得点が高いことが示された ($MSe = 0.87, LSD = 0.69, p < .05$)。

また、「おうちの人と話している時と、友達と話している時では、どちらが楽しいか」についての回答を示したものが図14である。各学年、男女共に「友達」が50%以上を占めているが、4年生の女子では「おうちの人」を選択した児童の割合が、他の学年よりも高い傾向が見られた。

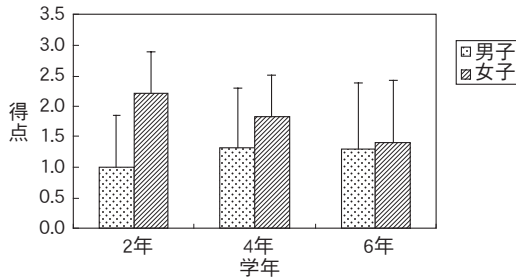


図13 おうちの人に友達との出来事を話す得点の平均と標準偏差

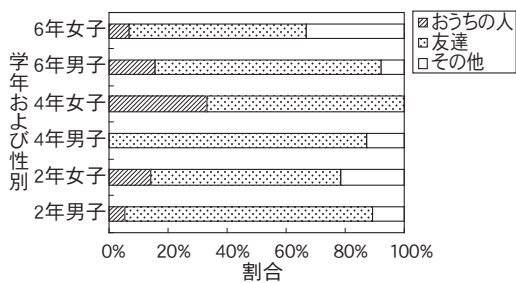


図14 「話しているのは楽しい」という質問に対する回答

(2) 親か友達かを選ぶ葛藤場面での選択

「学校で友達と遊ぶ約束をして帰宅すると、おうちの人からその日は家族で買い物に行く予

定だと言われた時に、友達と遊ぶのか、それとも買い物について行くのか」という、おうちの人か友達かという葛藤場面での選択を図15に示した。「友達」を選択する児童と「おうちの人」を選択する児童の割合に、性別や学年による違いは見られなかった。

また、「おうちの人と話している時と、友達と話している時では、どちらが楽しいか」についての回答を示したものが図14である。各学年、男女共に「友達」が50%以上を占めているが、4年生の女子では「おうちの人」を選択した児童の割合が、他の学年よりも高い傾向が見られた。

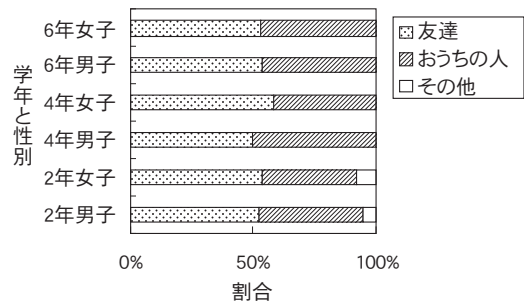


図15 おうちの人か友達かという葛藤場面での選択

次に、葛藤場面での選択理由を、「友達」と「おうちの人」の場合に分けた。「友達」の選択理由について、男子では、2、4年生で、「楽しい・遊びたい」のみであるのに対して、6年生ではその割合は40%程度と低くなり、代わって「約束」が過半数を占めていた。一方、女子では、どの学年においても「楽しい・遊びたい」が最も多かったが、「断ったら、向こうもいやな気持ちになると思う」や「断ったらかわいそう」といった回答からなる「配慮」が各学年において見られた。「おうちの人」の選択理由を見ると、

6年生において「親が大事」が占める割合は高く、男子では33.3%であるのに対して女子では57.1%であり、女子においてその傾向は高いことが窺える。2、4年生の女子では、「買い物の魅力」が過半数を占めていた。

(3) 電話で友達とおしゃべりをするか

図16は、「電話で友達とおしゃべりをするか」についての回答を示したものである。男子は6年生で、女子は4年生で電話でおしゃべりをする頻度は増える傾向が見られる。

電話でおしゃべりを「よくする」あるいは「たまにする」と回答した児童の電話でのおしゃべりの内容では、4年生の女子を除いて、男女共に「遊ぶ約束」が70%以上で最も多かった。これに対して、4年生の女子では、宿題や翌日の持ち物の「確認」が81.8%で最も多かった。「雑談」は、4年生の女子と6年生の男女で見られるが、いずれも20%程度であり、「電話でおしゃべりを楽しむ」ということは、児童においては高学年であっても少ないと考えられる。

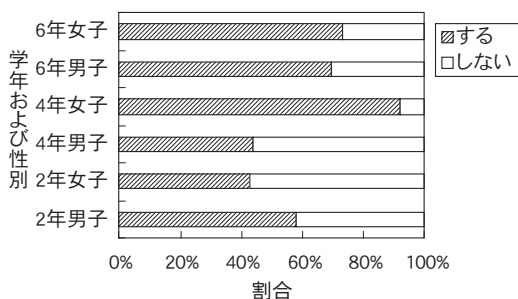


図16 電話でおしゃべりをするか

4. 友人関係の形

(1) ギャング・グループについて

黒沢(2001)がまとめたギャング・グループの特徴を参考にして、質問紙項目の回答の中か

ら、ギャング・グループの特徴を示すと考えられるものは、①メンバーの入れ替わりが全くない、②リーダーがいる、③自分がしたいことよりも友達を選ぶ、④親か友達を選ぶ葛藤場面で友達を選ぶ、⑤中休みにグループの友達と過ごしている、⑥昼休みにグループの友達と過ごしている、⑦放課後にグループの友達と過ごしている、⑧休日にグループの友達と過ごしている、⑨親よりも友達としゃべる方が楽しい、である。

同性のメンバーのみから成るグループに入っている児童34名を対象に、上記の項目のうち、①、②、③、④の4項目全てを満たし、かつ⑤⑥⑦⑧⑨の5項目中3項目以上を満たしているものを、ギャング・グループ体験者として該当者数を求めた。その結果、該当者は4年生男子で2名、6年生男子で1名であり、2年生および4年生と6年生の女子では該当者がいなかった。次に、ギャング・グループの規準を緩め、①または②に該当し、かつ④を含み、③、⑤～⑨の6項目中3項目以上を満たしているものを準ギャング・グループ体験者とする、4年生男子で1名、女子で2名、6年生男子で5名、女子で4名が該当した。ギャング・グループと準ギャング・グループの体験者数を合計しても、4年生男子で3名、女子で2名、6年生男子で6名、女子で4名であった。この結果は、ギャング・グループを体験している子ども達が存在することと、4年生より6年生で人数が増加することを示しているが、全体の人数に占める割合を考えると、一般的に児童期後期に多くの子ども達が体験しているとは言い難いことを示している。

(2) チャム・グループについて

同性のメンバーからなる仲良しグループに

入っている児童34名を対象としてチャム・グループの特徴を示す項目の数を求めた。チャムグループの特徴として、本研究で用いた質問項目では①おしゃべりの内容に、自分達が同じように感じていることの確認が見られる。②おしゃべりの内容に、興味・関心が同じであることの確認が見られる。③電話でのおしゃべりの中で、互いの類似性の確認が見られるである。この3項目が該当する。しかしながら結果は、これらの①②③の項目を2つ以上満たす児童はいなかった。本研究の対象とした年齢段階では、チャムのような友人関係を持つ児童は見られなかった。

総合考察

本研究では、児童が友達のことをどのように認識し、どのように過ごしているのか、また親との関係がどのようなものであるのかという実態調査を通して、児童の友人関係がどのように変化するのか、ギャング・グループやチャム・グループが見られるのか、ということについて検討した。

1. 親子関係から友人関係へ

友達の人数は、4年生から6年生にかけて学年が上がるにつれて増加し、友達の中でも、異性の友達や「おしゃべり」をする友達は学年が上がるにつれて増えていた。また、秘密が話せる友達や大事な友達も、4年生から6年生にかけて増えることが示された。これらの結果から、友達の中でも、親密性が高い友達が増えるのは、男女ともに児童期中期から後期にかけてであることが明らかになった。さらに、「友達との約束を守るか、親と一緒に買い物に行くか」と

いう葛藤場面で友達を選び、その理由として、「友達と遊んだ方が楽しい」あるいは「友達と遊びたい」といった回答が高い割合を占めた。6年生の男子においては、「約束を破るのは悪い」という回答に代表されるように、友達との約束を守ることを重視するようになることが示された。友人関係が小学校の時期に着実に発達していることが明らかにされた。

しかし、友達を選ぶ児童と、親を選ぶ児童の数に大きな差はないことは、心理的依存の対象が親子関係から友人関係へと移行させて行く中で、児童期においては友人関係とともに親にも依存していることが明らかになった。

2. ギャング・グループ、チャム・グループについて

本研究においては、4年生の男子では16名中3名、女子では12名中2名が、6年生の男子では13名中6名、女子では15名中4名が、ギャング・グループに該当した、しかし従来から言われているようなギャング・グループについては、本研究においてはほとんどみられなかった。ギャング・グループと確認されなかったグループの特徴を述べると、第一に、グループのメンバーは固定しているがリーダー的存在の人はいなかったということがある。そして第二に、グループのメンバーは固定しているが、休み時間等にグループのメンバーと過ごしていないことがあった。また、放課後や休日に友達と一緒に遊ぶ児童も少なく、同一行動があまりみられなかった。これは、従来指摘されているような、ギャング・グループは消失を示している可能性を示している。榎本(1999)は、青年期の友人関係の研究で、現代の男子では遊ぶ関係から互いの相違点を理解し、互いに尊重した関係へと

変化していることを示している。本研究では、典型的なギャング・グループはほとんど見られなかった。チャム・グループについては全く見られなかった。調査の対象とした児童が、年齢的に、そのような友人関係を持つことが期待される年齢より、少し若年であった可能性もあるが、今後は現代の児童期から青年前期の子どもの友人関係の発達について新に検討すべき必要性を示している。

3. 友人関係における男女差

友達との関係性については、秘密を話す経験の増加や友達の重要性の高まりが男子では学年が上がるにつれて段階的に見られたのに対して、女子では4年生で顕著に見られた。また、「友達の仲良しグループがある」と答えた割合も同様の増加傾向がみられたことから、友達との関係性の深まりには性差があり、男子は学年が上がるにつれて友達との関係性が深まっていくのに対して、女子では2年生から4年生にかけて友達との関係性が深まり、友達の仲良しグループのような、特定の友達とのより親密な付き合いが見られるようになると考えられる。

また、学年が上がるにつれてグループのメンバーが固定してくる傾向が見られたが、4、6年生のグループで、「リーダーのような人がいる」と回答した人数は少なく、それは特に男子において顕著に見られた。このことに関しては、6年生の男子ではグループに入っている児童の過半数が、グループのメンバーは「3人」とであると答えてしていたため、このような少人数のグループではメンバーが変化することは少なく、それゆえメンバーが固定していると考えられる。また、少人数であるために、リーダーのような存在は必要がないことも考えられる。

引用文献

- Bigelow, B.J. 1977 Children' s friendship expectations: A cognitive developmental study, *Child Development*, 48, 246-253.
- 遠藤純代 1990 友達関係 無藤隆・高橋恵子・田島信元(編) 発達心理学入門 I 乳児・幼児・児童 東京大学出版会.
- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 *教育心理学研究*, 47, 180-190.
- 坂坂亨 1996 子どもの仲間関係が育む親密さ—仲間関係における親密さといじめ 現代のエスプリ, 353, 43-51, 至文堂.
- 坂坂亨 1998 児童期・思春期の発達 下山晴彦(編) 教育心理学II—発達と臨床援助の心理学— 東京大学出版会.
- 坂坂亨・岡村達也 1986 キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討 *臨床学研究*, 4(1), 15-26.
- 黒沢幸子 2001 チャムとピア・グループ(個人間差) *児童心理* 55(16), 136-143, 金子書房.
- 黒沢幸子・有本和晃・森俊夫 2003 仲間関係発達尺度の開発 —ギャング、チャム、ピア・グループの概念にそって— 目白大学人間社会学部紀要 第3巻 目白大学人間社会学部出版.
- Sullivan, H.S. 1953 *Conceptions of modern psychiatry*, W. W. Norton, New York (中井久夫・山口隆訳 1976 現代精神医学の概念 みすず書房)
- 田中熊次郎 1964 実験集団心理学 明治図書.